台灣日語初級學習者的發音學習信念

羅濟立

東吳大學日本語文學系教授

摘要

本研究透過問卷，調查台灣日文系一年級學生在學習日語的發音時，抱持著什麼樣的信念。問卷調查以 Horwitz（1985,1987,1988）開發的 BALLI 為基礎，配合台灣的學習環境設計出 22 道題目。本研究也調查性別、入學前日語學習經歷、發音成績是否與學習信念有關。調查發現，學生最支持的信念是「我覺得為了正確發音，大量聽說日語很重要。」此外，性別上有 3 項、入學前日語學習經歷上有 1 項、發音成績上有 1 項信念在統計上呈現顯著差異。另外，日語的發音學習包含四個因素:「積極的心態學習日語發音」、「學習日語發音的焦慮不安」、「對日語發音缺乏自信」、「消極地學習日語發音」。因此，教師必須調查學習者的信念，以便提供尋找更合適的教學方法，或是提供了更好的學習環境和學習計劃。

關鍵詞：台灣初級學習者、日語發音、學習信念、因素分析

受理日期： 2017.08.31

通過日期： 2017.10.20

Elementary learner's beliefs in Taiwan for Japanese pronunciation

Luo, Ji-Li

Professor, Soochow University, Taiwan

Abstract

This paper investigates Taiwanese student's beliefs of Japanese pronunciation. Questionnaires containing 22 questions of beliefs about pronunciation. This study also investigates whether the gender, pre-school Japanese learning experience, pronunciation results are related to the learner's beliefs. The survey found that the highest belief is " I think it is important to hear a lot about listening and speaking. " And most of the the learning beliefs and performance are not related. In addition, four factors in pronunciation were found: 1) positive attitude toward pronunciation, 2)unease or worry over pronunciation, 3) lack of confidence in pronunciation and 4) negative attitude toward pronunciation. Teachers should remember that these beliefs always effect students in various degrees and therefore they should always try to keep students motivated and respect their positive attitude toward pronunciation.

Key words: elementary learner' in Taiwan, learner beliefs,
Japanese pronunciation, factor analysis

台湾人初級日本語学習者のもつ発音学習のビリーフ

羅濟立

東呉大学日本語学科教授

要旨

本研究では、日本語専攻の大学一年生が日本語の発音学習に関してどのようなビリーフを持っているかをアンケート調査により明らかにした。調査は Horwitz（1985，1987，1988）が開発した BALLI を基に作成した 22 項目である。また、学習ビリーフと性別、入学前の日本語学習歴、成績の高低と関連があるかどうかを調査・検証した。今回の調査によって分かった平均値が最も高い数値を示したビリーフは「正しい発音のためには日本語をたくさん聞いたり話したりすることが重要」である。また、ほとんどの学習ビリーフと学業成績とは関連性がないことが明らかになった。なお、学習者が発音の習得に対してどのように感じているのかについて、〈日本語の発音学習への気づき・積極的態度〉、〈日本語の発音に対する不安とあきらめ〉、〈日本語の発音の自信のなさ〉、〈日本語発音へのネガティブな参加〉の 4 因子から構成されていることが明らかになった。したがって、学習者のビリーフを調査しながら、より適切な教育法を取り入れたり、よりよい学習環境や学習プログラムを提供したりしていくよう、日本語教師側も検討する必要がある。

キーワード：台湾人初級学習者、日本語発音、学習ビリーフ、
因子分析

台湾人初級日本語学習者のもつ発音学習のビリーフ

羅濟立

東呉大学日本語学科教授

1．はじめに

発音はどの言語を学習する際に、共通して必ず学習しなければならない言語技能や学習項目の一つである。日本語教育では、聞き取りと会話が重視されると共に、音声教育の必要性もますます注目が高まっている。なかでも、自然な日本語を習得するためには、発音指導は欠かせないものとなっている （鮎澤 1993、戸田 2001、中川 2002 等)。このような考えの下、近年日本国内では、更に多くの発音指導に関する研究と実践報告が次々と発表されている（磯村 1996、戸田 2001、松崎・河野 2005 など)。それに対して、台湾などその他海外の国々での日本語教育では､発音教育はまだ完全とは言えない。筆者は台湾で日本語教師に従事しているが、同じ状況に直面している。学会や学報の論文発表で、発音指導に関する研究は、文法や語彙などのその他の領域ほど多くない[1]。そして、教育現場では、実際に教室で発音指導をしたことがない教師の中には、多くが「発音に自信がない」､「発音の規則がわからない」と言っており､「どうやって教えたらいいかわからない」という教師も少なくない。このような教師を支援するために､有効な発音指導法を考え出し､さらに個々に対する発音教育理論と教育方法を提案する必要性がある。

日本語学習には、さまざまな要因の影響があり、大部分は社会的要因（文化或いは学習環境等）と個人的要因に分けられる（Oxford 1990)。個人的要因には、ビリーフ・態度・学習方法などが含まれるが、日本語発音習得研究の中で、台湾人学習者のビリーフ・態度・

[1] 賴（2016：183）の研究では、現代（1981-2015）の日本語研究の重点は過去（1945-1980）とは異なり、文法研究が多く（20.87%)、音声音韻関連の研究は 7.05%しかないと指摘されている。

学習方法に関する研究は多くない。また、今日では日本語を学習する若者は増加の一途をたどり、台湾の日本語教育に大きな影響を与えている。日本語学習のひとつとして、発音のビリーフ・態度・学習方法を研究することは非常に重要である。音声は言語の中で、篇章と談話・文・文節・単語と形態素の要素の次にあたり、言語で最も重要な表現形式のひとつである。日本語教育では、正しい発音ができることが、学習者が正確に言いたいことを表現できるか否かに大きく作用する。正確な発音は、学習者の日本語学習を助長し、基本的な発音知識の理解や、その他の言語能力の習得に大きな影響を与える。だが、わかりにくい発音は、学習者が日本語で交流する妨げとなり、学習者の学習への興味や自信に必ず影響するであろう。

ところで、学習者の一般的な言語学習に関しての独自の意見、思いや価値観は 「Belief（s)」と呼ばれ、日本語では「ビリーフ」、「信念」、「確信」などと訳されている。ビリーフの研究は、Horwitz（1985、1987）が BALLI（Beliefs About Language Learning Inventory）を開発したことがきっかけとなった。Horwitz（1987）は、ビリーフを網羅的に把握するために「言語学習の適性」、「言語学習の難易度」、「言語学習の本質」、「学習とコミュニケーションストラテジー」、「動機」の 5 領域・34 問の質問項目から成る「BALLI」を作成した。Horwitz は英語学習者と教師のビリーフ調査を実施し、学習者のビリーフがさまざまであること、ビリーフが学習ストラテジーに影響していることなどを明らかにした。この後、他の多くの研究者が各目的に合わせた質問項目で BALLI 応用版を作成し調査を行っている。

日本語教育の分野には、ビリーフと学習ストラテジーの関係を考えたもの（橋本 1993、岡崎 1996 など）、特定のグループを調査し、その特徴を示したもの（若井ほか 2004、阿部 2009、高崎 2014 など）、グループによるビリーフの差異を示したもの（水田ほか 1995、山本 1999、若井ほか 2004 など）など、三つの側面からの論考が挙げられる。また、台湾人日本語学習者のビリーフを探究したものがある（佐藤 2007、盧 2011 など）が、日本語発音の学習ビリーフを焦点を当

て考察したものはほとんどない。

このように、学習者のビリーフは、外国語学習に影響を与えると考えられ、教師がそれを理解することは、教材、教授法、タスクなどを考え、コースデザインをする上で、大切な情報となる。学習者の教育や指導に当たっては、学生がどのようなビリーフを持っているかを知った上で行うことが大切であると考えられる。例えば、日本語発音の授業を行う際には、まず学習者が発音習得に関してどのようなビリーフ、信念、言語観などを持っているかを把握していれば、それを念頭においてカリキュラムやプログラムを作成することが可能である。また、学習者が自分自身のビリーフを知ることは、より効果的で自律的な日本語発音の学習を進めるのに役立つと考えられる。

以上のことを踏まえ、本稿では、日本語の発音学習の際に台湾人初級学習者が感じているビリーフにはどのようなものがあるか。また、日本語の発音学習に関してどのような要因が存在するか。ビリーフは性別・入学前の日本語学習歴・発音の成績などとは関係があるか。発音教育の変遷と現状を踏まえた上で、今後の日本語教育における発音指導のあり方を探る第一歩として、学習者が発音学習に対してどのような姿勢で臨んでいるかを明らかにするための意識調査を行った。これらの結果を踏まえた上で、今後の台湾の発音教育改善のための基礎データを考えていく。

2. 本稿の目的と調査方法

2.1　目的

本稿はこれまであまり研究のない台湾で日本語を学ぶ大学生の発音学習ビリーフの調査結果を報告することで、台湾人に対する日本語発音教育のための資料を提供することを目的としている。台湾人の発音学習のビリーフを考察することによって、その特徴を示すことにする。加えて、性別、入学前の日本語学習歴の有無、発音の成績の差によるビリーフの違いも取り上げる。

2.2 調査対象

2017 年 5 月下旬～6 月上旬に、台北市内にあるＡ大学の日本語学科で日本語を勉強している、一年生終了時の学習者で、もうすぐ二年に進級し日本語学科の発音の講義、訓練を受けているクラスの学生である。この時点で、学生は日本語発音学習ビリーフに対して、一定の概念と考え方があるはずである。発音の講義は 1 年間の選択科目であるが、言語学習の背景を明確にするために受講期間が 1 年未満の者、非台湾籍の者、日本語学科ではない者、またはこのクラスの一年生以外の学生は研究対象には入れない。欠損値のあるものを除き、有効回答数が 121 得られた。121 名全員の発音学習ビリーフを調査する以外にも、発音科目の期末口頭試験の最終成績に基づき、三つのクラスからそれぞれ成績の高い 10 名（合計 30 名）と成績の低い 10 名（合計 30 名）に対して担当教員に評価を依頼し、その発音学習ビリーフの違いを比較対照して探っていく。評価の内容・対象は教員によって若干異なっているが、単音の正確さや、アクセント、イントネーション、リズムなどの要素を基準とされている。なお、教材は『日語發音學 25 講』（羅濟立・呉秦芳、五南出版社、2013 年）、『日語發音基礎教材』（陳永基・蔡茂豐、大新書局、2005 年）とプリント配布であり、授業は基本的に比較対照法の講義形式で、練習問題などの活動を通じて理解度を確認しながら進められる。授業の内容は、清音、濁音、母音無聲化、特殊拍、アクセント、イントネーション、リズム、縮約形などが含まれている。

2.3 アンケート内容について

アンケートは 3 部で構成される。第 1 部は基本資料であり、性別、入学前の日本語学習歴、日本語能力検定試験に受かったか、日本に滞在したことがあるか、日本人と交流したことがあるか、発音の講義を受講する最大理由などの質問が含まれる。第 2 部は発音学習ビリーフ、第 3 部は発音学習ストラテジーのアンケート調査である。なお、紙幅のため、本稿では第 2 部の発音学習ビリーフに関する調

査結果を報告するが、第3部の発音学習ストラテジーについての考察は別稿に譲る。

本研究で調査に用いる質問紙を作成するに当たり、学習のビリーフ調査はHorwitz（1985、1987、1988）が開発したBALLIを基に、台湾人学習者や学習環境にあった設問内容を考えて作成した。その後、5名の日本語学習者を対象に予備調査を行い、質問紙全体の分量や言葉の表現などの項目内容を修正し、日本語版による22の質問紙項目を確定した。なお、本調査では中国語版の調査用紙を用いた（質問文は、付録として論文の末尾に載せている）。中国語版への翻訳にあたっては、筆者がまずすべての項目を訳し、その後、バイリンガルの日本語教師（中国語母語話者）2名によりバックトランスレーションを行い、項目の表現を再検討した。

これらの項目に対して以下の方法で分析を行った。まず、各質問別に学習者の回答（5（とても当てはまる）から1（全く当てはまらない））別に人数の集計と平均値および標準偏差の算出を行った。その後、t検定、カイ二乗検定によって、性別、入学前の日本語学習歴の有無、発音の成績の差によるビリーフの違いを考察した。また、日本語学習者の発音習得に対するビリーフについての全体的な特徴を捉えるため、全22項目に対して全ての項目の相関行列を計算し、因子分析を行った。初期因子抽出法には主因子法を用い、その後バリマックス回転を用いた。統計ソフトにはSPSSを用いた。

3. 調査の結果と考察

3.1 調査の対象

対象者121名（男33名、女88名）のうち、入学前に日本語を勉強したことがない学生は半数くらい占めており、47.9%であった。日本語学習歴が1年未満の学生は29%で、1年以上の学生は23.2%であった。また、大部分の学生はまだ日本語能力試験（JLPT）を受けておらず、78.5%を占めている。日本の滞在歴もほとんどなく、94.2%であった。「日本人と交流しますか」という問いでは、5段階

のスケールで「5.よく交流します」と「4.交流します」を合計した肯定派はわずかな5.8%であった。

また、発音の講義を受講する最大の目的では、「発音が必要だと感じるから」75.2%で最も多く、次に「自らの授業履修の計画だから」（10.7%）、以下「日本語の発音に興味があるから」(7.4%)、「教師の評判がいいから」(3.3%)、「授業の時間がいいから」(1.7%)、「その他」（1.7%）となった。

3.2　発音学習ビリーフにおける全体の平均値

逆問題の5番、7番、14番、15番、18番、19番を再スコアリングして、学習者が日本語の発音学習に関してどのような意識を持っているか、その全体的な傾向を見るために項目別の平均値を表にしたものが表1である。

表1　日本語の発音学習に対する学習者ビリーフ

項目別	平均数	標準偏差
1.発音はネイティブ並にうまくなりたい。	4.51	.708
2.発音が悪いと人前で日本語を話すのが恥ずかしい。	4.08	.791
3.日本に行かなければ日本語の発音は上手にならないと思う。	2.88	.744
4.正しく発音できれば単語を正しく書けると思う。	3.75	.878
5.発音が上手でなくとも将来困ることはない。	4.03	.763
6.発音の学習ということは、単語の発音を覚えるのは重要だと思う。	4.29	.638
7.台湾人日本語でも通じれば十分だ。	3.74	1.015
8.発音の理論的な学習は、正しい発音をするために役立つ。	3.79	.752
9.学校の授業で発音学習の時間がもっとあるべきだ。	3.78	.724
10.日本語の発音は単語と単語の音のつながりが重要だ。	4.37	.593
11.間違った発音をしたらすぐに先生や日本人に直してほしい。	4.24	.633

12.イントネーションやアクセントを学習することは重要だ。	4.41	.615
13.正しい発音のためには日本語をたくさん聞いたり話したりすることが重要だ。	4.58	.544
14.発音の学習に時間を割いている暇はない。	3.26	.911
15.日本語を発音（練習）する機会がない。	3.17	1.030
16.発音がうまくなる方法があるならとにかく知りたい。	4.39	.597
17.発音記号が読めれば正しい発音ができると思う。	3.83	.699
18.自分の発音が正しいかどうか自信がない。	2.59	.919
19.正しい発音を頭では理解していても実際に発音できない。	2.96	1.044
20.どんなに日本語の知識や能力がある人でも、発音が悪いと日本語ができない印象を覚える。	3.58	.901
21.発音の学習ということは、先生の指導より自主的に勉強するのは重要だ。	2.97	.921
22.発音の正確さより流暢さのほうが重要だ。	3.25	.819

平均値が 3.6 以上であった上位 5 項目についてみて見ると、最も高い数値を示したのは「13.正しい発音のためには日本語をたくさん聞いたり話したりすることが重要だ。」で、次に「1.発音はネイティブ並にうまくなりたい。」、「12.イントネーションやアクセントを学習することは重要だ。」が続き、4 番目が「16.発音がうまくなる方法があるならとにかく知りたい。」、5 番目が「10.日本語の発音は単語と単語の音のつながりが重要だ。」という結果であった。

上位の項目に関して、最も高い数値を示したのは「13.正しい発音のためには日本語をたくさん聞いたり話したりすることが重要だ。」で、学習者は正しい日本語の発音を聞くというインプットが正しい発音のアウトプットに繋がると考えていることがわかる。「1.発音はネイティブ並にうまくなりたい。」が 2 位に入っており、発音学習への高い期待性・可能性といった認知を示している。4 位の「16.発音がうまくなる方法があるならとにかく知りたい。」は日本語発音学習

のポシティブな考えである。発音の内容に関する項目では「12.イントネーションやアクセントを学習することは重要だ。」もトップの3位に入っており、最近のコミュニカティブな言語教育の流れの中で重要視されているリズム（rhythm)・超分節的（suprasegmental）な要素も発音の上達には欠かせないと認識している。また「10.日本語の発音は単語と単語の音のつながりが重要だ。」も5位にとなっており、これらの結果から、学習者が発音学習の際に何が重要となるか、逆に言えば何が難しいかを意識しているように読み取れる。

平均値が3.0以下であった最も低い数値を示した項目及び2番目、3番目、4番目に低かった項目を見てみると、「18.自分の発音が正しいかどうか自信がない。」、「3.日本に行かなければ日本語の発音は上手にならないと思う。」、「19.正しい発音を頭では理解していても実際に発音できない。」、「21.発音の学習ということは、先生の指導より自主的に勉強するのは重要だ。」となった。平均値が比較的低いが、学習者は自分の発音について否定的であるというように、心理的にネガティブな項目も存在していることがわかった。発音学習に関したネガティブな考え方ができた背景には、これまでの学習経験、成績不振、学習ストラテジーなどが想定される。教師としては、授業で学生が感じる不安や自信のなさを軽減できるようにしなくてはならない。こうした苦痛・絶望感といった考えを持つ学習者に対する対応策としては、自信を持たせること、学習ストラテジーを指導すること、発音学習の楽しさを感じるような授業をすることが考えられる。注目に値するのは、「21.発音の学習ということは、先生の指導より自主的に勉強するのは重要だ。」である。平均値が中間値の3.5を下回った2.97という回答結果は、学習者が教師依存・期待傾向が強いことを示唆している。そのことから、自律学習または協働学習のできる環境を作ったり、教師以外の学習リソースを提供したりして、教師依存度を低める工夫が必要となると考える。

3.3　性別、入学前の日本語学習歴の有無、発音の成績の差によるビリーフの違い

まず、性別が発音学習のビリーフに影響を与えるかどうかを調査した。22 項目のビリーフすべてに t 検定 5%水準をかけたところ、表 2 のように、ビリーフ 2 番・16 番・18 番で有意差が出た。

表 2　性別が発音学習のビリーフに影響を与えた項目

ビリーフ	男性 33 名 （平均値、SD）	女性 88 名 （平均値、SD）	t 検定
2 番	3.79、0.96	4.19、0.692	t(119)=-2.566, p<.05
16 番	4.21、0.65	4.45、0.565	t(119)=-2.015, p<.05
18 番	2.91、0.98	2.47、0.87	t (119) =2.409, p<.05

つまり、「2. 発音が悪いと人前で日本語を話すのが恥ずかしい。」と「16.発音がうまくなる方法があるならとにかく知りたい。」では女性の平均値が男性の平均値に比べて有意に高く、「18.自分の発音が正しいかどうか自信がない。」（逆問題）では男性の平均値が女性の平均値に比べて有意に高いことがわかった。女性は男性より発音のよしあしが気になり、自信が足りないが、発音学習に対する姿勢として、より多くの学習リソースを望むという意味でより積極的であると解釈できよう。逆に、男性は女性より発音に対して無頓着なので、自分の発音に自信をもち、さらなる学習リソースを求めないとも解釈でき得る。これについては、認知心理学など、別の観点を取り入れる必要があり、今後の課題にしたい。

次に、入学前に日本語学習歴のあるグループ 63 名と、学習歴のないグループ 58 名を 2 つにグループに分け、発音学習のビリーフを比較した。t 検定の結果、22 項目のうち、ビリーフ 19 番のみで有意差が出た（t（119）=-2.233, p<.05)。入学前に学習歴のあるグループの平均値(3.16、SD1.001)が学習歴のないグループの平均値(2.74、SD1.05)に比べて高かったことから、「正しい発音を頭では理解して

いても実際に発音できない。」（逆問題）が発音学習に影響するビリーフであるとは考えられる。つまり、学習歴のない学生にとって、日本語や日本人との接触する機会は比較的少なく、そのような環境では発音学習に対する自信が高くないのではないだろうか。

さらに、発音の成績を下位群（30 名）、中位群（61 名）と上位群（30 名）の三つの学習者グループに分けて比較した。各グループの回答の平均を比較し、ピアソン法によるカイ二乗検定 5%水準で有意差が出たのはビリーフ 12 番のみであった。すなわち、「12.イントネーションやアクセントを学習することは重要だ。」については、「下位群 4.27＜中位群 4.41＜上位群 4.57」という順に、発音の成績の上位群がもっとも高い支持率を示しているように見える。その理由として、上位群の学習者は、日本語を上手に話せるためには、イントネーションやアクセントなどのリズム・超分節音素を必要としており、学習が進んでいるからではないかと考えられる。したがって、リズムや、超分節音素の練習を望んでいる学生ほど、日本語の発音を統制する技能に長けており、日本語教師によって日本語発音能力が高いと評価される可能性が示された。日本人母語話者の評価の観点から、ミニマルペアのような音素の聞き分けなどの単音に重点を置くのではなく、韻律（prosody）を取り扱うことが唱えられている（佐藤 1995）。リズム・超分節的な要素を教えることが学習者のパフォーマンスを向上させるとし、発音教師は発音に対してポーズや、表情、感情的な目的のためにはどこに強勢を置くかを考えて声を操ることにあまり注意を払わないと、学生の発話が単調で、感情のないものとなるため、韻律の指導を配慮することが重要である。

以上のことから、性別、入学前の日本語学習歴の有無、発音の成績の差によるビリーフの違いが検出された。発音学習に影響を与えたビリーフをさらに見極め、ネガティブなビリーフを持つ学習者の発音能力の向上に視点を置き発音の教育を見直す必要がある。

3.4　発音学習ビリーフの因子分析

3.4.1 項目分析

因子分析を行う前に、項目分析（Item-analysis）を行った。被験者を総合得点の上位群（27%）と下位群（27%）に分け、回答の分布を比較して項目のよしあしを検討した結果、表 3 のようにまとめる。

表 3　発音学習ビリーフの項目分析

項目	決断値	説明	項目	決断値	説明
1	7.709***	○	12	6.395***	○
2	6.276***	○	13	6.730***	○
3	1.904	削除	14	6.912***	○
4	3.077***	○	15	2.312***	○
5	5.831***	○	16	5.057***	○
6	5.904***	○	17	2.352***	○
7	7.102***	○	18	5.367***	○
8	4.766***	○	19	5.993***	○
9	5.194***	○	20	3.927***	○
10	7.551***	○	21	1.436	削除
11	5.382***	○	22	-1.128	削除

注：「***」は $p<.05$、「○」は保留を示す。

表 3 によって示されているように、「3.日本に行かなければ日本語の発音は上手にならないと思う。」、「21.発音の学習ということは、先生の指導より自主的に勉強するのは重要だ。」と「22.発音の正確さより流暢さのほうが重要だ。」という三つの項目は識別力を持っていないため、削除することにした。保留した 19 項目に対して因子分析を行うことにする。

なお、因子分析の前に、本調査のデータが因子分析に適するかど

うかを測るため、KMO and Bartlett’s test of sphericity を行った。KMO test の KMO 値は 0.734、Bartlett’s test の結果は Sig=0.000 であった。これらは最低基準値より高いため、データが因子分析に適することが確認された。

3.4.2 発音学習ビリーフの因子分析

台湾の日本語学習者が抱いている発音学習ビリーフの構造を明らかにするため、得られた 121 人の回答に基づき因子分析を行ったところ、4 因子構造が妥当と判断した。天井効果が見られた項目、十分な因子負荷量を示さなかった項目を除外し、再び主因子法・プロマックス回転を行った結果、18 項目による 4 因子が抽出された。因子分析の結果を表 4 に示す。表 4 に示したのはバリマックス回転後の因子負荷量であり、太字となっている因子負荷量により因子を解釈した。

表 4　発音習得に対する学習者のビリーフ（因子分析の結果）

項目	因子1	因子2	因子3	因子4
12. イントネーションやアクセントを学習することは重要だ。	**.776**	.103	-.029	.039
6. 発音の学習ということは、単語の発音を覚えるの重要だと思う。	**.689**	.002	.082	.050
11. 間違った発音をしたらすぐに先生や日本人に直してほしい。	**.669**	.200	.062	-.213
8. 発音の理論的な学習は、正しい発音をするために役立つ。	**.660**	-.053	.024	.381
10. 日本語の発音は単語と単語の音のつながりが重要だ。	**.623**	.167	.163	.188
9. 学校の授業で発音学習の時間がもっとあるべきだ。	**.602**	.203	-.110	.156
1. 発音はネイティブ並にうまくなりたい。	**.587**	.321	.240	-.171

16.発音がうまくなる方法があるならとにかく知りたい。	**.564**	.294	-.077	-.135
13.正しい発音のためには日本語をたくさん聞いたり話したりすることが重要だ。	**.538**	-.059	.404	-.297
4.正しく発音できれば単語を正しく書けると思う。	**.426**	.032	-.265	.230
7.台湾人日本語でも通じれば十分だ。	.175	**.785**	.132	.217
20.どんなに日本語の知識や能力がある人でも、発音が悪いと日本語ができない印象を覚える。	-.042	**.711**	.141	-.181
2.発音が悪いと人前で日本語を話すのが恥ずかしい。	.227	**.702**	-.062	.045
5.発音が上手でなくとも将来困ることはない。	.235	**.674**	.137	.104
19.正しい発音を頭では理解していても実際に発音できない。	.044	.202	**.810**	.141
18.自分の発音が正しいかどうか自信がない。	.026	.035	**.802**	.227
15.日本語を発音（練習）する機会がない。	-.045	-.013	.124	**.832**
14.発音の学習に時間を割いている暇はない。	.189	.213	.332	**.672**
特徴値	4.035	2.473	1.833	1.752
変異的%	21.239	13.016	9.649	9.222
累加%	21.239	34.255	43.904	53.126
KMO	.734			
Bartlett	近似x^2値＝740.560***			

第１因子の項目は、「12.イントネーションやアクセントを学習することは重要だ。」、「6.発音の学習ということは、単語の発音を覚えるの重要だと思う。」、「11.間違った発音をしたらすぐに先生や日本人に直してほしい。」、「8.発音の理論的な学習は、正しい発音をするために役立つ。」、「10.日本語の発音は単語と単語の音のつながりが重要だ。」、「9.学校の授業で発音学習の時間がもっとあるべきだ。」、「1.発音はネイティブ並にうまくなりたい。」、「16.発音がうまくなる方法があるならとにかく知りたい。」、「13.正しい発音のためには

日本語をたくさん聞いたり話したりすることが重要だ。」、「4.正しく発音できれば単語を正しく書けると思う。」など、日本語の発音学習に対して好意的もしくはポジティブな項目からなるため、〈日本語の発音学習への気づき・積極的態度〉と命名した。

第2因子の項目は、「7.台湾人日本語でも通じれば十分だ。」、「20.どんなに日本語の知識や能力がある人でも、発音が悪いと日本語ができない印象を覚える。」、「2.発音が悪いと人前で日本語を話すのが恥ずかしい。」、「5.発音が上手でなくとも将来困ることはない。」など、日本語の発音に対しての不安やあきらめを表す心理的にネガティブな項目が含まれることから、これを〈日本語の発音に対する不安とあきらめ〉と命名した。

第3因子の項目は「19.正しい発音を頭では理解していても実際に発音できない。」と「18.自分の発音が正しいかどうか自信がない。」との、日本語発音の自信のなさを言及する項目からなるため、〈日本語の発音の自信のなさ〉と命名した。

第4因子の項目は、「15.日本語を発音（練習）する機会がない。」と「14.発音の学習に時間を割いている暇はない。」との、日本語発音の練習・学習への積極的でない態度を言及する項目からなるため、〈日本語発音へのネガティブな参加〉と命名した。

以上のように、台湾人初級学習者の発音学習のビリーフは〈日本語の発音学習への気づき・積極的態度〉、〈日本語の発音に対する不安とあきらめ〉、〈日本語の発音の自信のなさ〉、〈日本語発音へのネガティブな参加〉の4因子から構成されていることが明らかになった。この4つの因子は台湾人学習者の日本語発音の学習意識を端的に表していると言える。この結果から、教師にとって必要なことは、4つの要因が常に学習者の中には混在しているという事実を認識することである。

コミュニケーションのための日本語能力が求められている今日、台湾の高校のクラブや第二外国語としての日本語の授業であれ、大学で行われている初級（一年生）の授業であれ、発音の能力を伸ば

すことは決して容易ではない。自ら発音の必要性・重要性を積極的に意識し、学習方法を作り上げなければ、話すことはもちろん、聞き取りに関しても正確に行うことは困難であろう。そのような現状に対して、「日本語の発音学習への気づき・積極的態度」という意識は重要であり、学習者が自主的に発音の向上に努めることが求められている。一方、学習者に「積極的参加」を促すためには教師も発音教育に「積極的参加」をする必要がある。つまり、教師自身はこのような現状が背景にあることを認識し、発音のチェッカーとして、発音に関する音声学や音韻論の知識、教授法を学ぶことが求められているのである。

しかし、ビリーフ２番「発音が悪いと人前で日本語を話すのが恥ずかしい。」に代表されるように、学習者が日本語の発音に対して恐怖、絶望感やコンプッレクスを抱いていることも否めない。そもそも、「日本語らしい発音」のためには、濁音、特殊音素のような中国語の音素にはない日本語の音素の習得はもちろんのこと、近年重要視されているアクセント、イントネーション、ポーズといった韻律の要素を習得することが不可欠となる。日本語のアクセント体系は中国語と同様に「高低」であるにもかかわらず、日本語のアクセントは「音節内ではなく、モーラにまたがること」、「助詞が付いた場合」、「い形容詞・動詞の活用形」などを考えると、台湾人学習者にとって母語とは全く異なるアクセント体系を習得することは決して簡単ではない。そのような学習過程においては、「日本語の発音に対する不安とあきらめ」が時々現れるであろう。驚いたことに、「台湾人日本語でも通じれば十分だ」(平均値 3.74)と思っているように、たとえ誤った表現や発音であっても、コミュニケーションをとること、より実践的な技能が重要だという姿勢がうかがわれる。発音に関してはどこまでネイティブのようになる必要があるのか意見の分かれるところである。近年、発音教育は「正しい発音」から「理解される（intelligible)」発音、「許容できる（acceptable)」発音へとターゲットが変わりつつある。拙稿（2017）では、「今後日本語学

習の際に重要とみなしている技能は何か」について、台湾のある大学二年生（143 名）を対象に調査を行った。8 つの言語技能の結果は順位に並べると以下のとおりであった（括弧内に％を示す)。「会話（36.4)」、「翻訳（22.4)」、「社会コミュニケーション能力（11.9)」の 3 項目では 10％を超えたが、「文法・読解（9.1)」、「文字・語彙（8.4)」、「聴解（7.0)」、「作文（3.5)」、「発音（1.4)」では他の項目と比較して低い数値を示した。この結果、現時点での重要度で学習者は「発音」を最も重要度が低いと認識していることが明らかとなった。発音教育は、時代的流れからコミュニケーションのための実用的な指導の重要性が叫ばれる一方、「発音」が他の言語技能よりも重要度が低いという結果となった。この発音の重要度が低ければ低いほど、発音学習を動機付けることも困難になる一方であろう。「理解される」「許容できる」発音も程度問題で、聞き手に非常に負担をかけたり、話して自身が自信不足で話すことをためらったりするような発音はやはり矯正必要があると考えられている（Carruthers1987)。したがって、発音学習への動機を上げる工夫が必要である。学習者の動機を上げる授業方略として、鈴木（2014：98）は、Dörnyei が示した（A）Creating the basic motivational condition.（B）Generating initial motivation.（C）Maintaining and protecting motivation.（D）Encouraging positive retrospective self-evaluation.[2]という四つの柱を元に、学生の状況に応じて具体的な対応策を組み立てていくことで学生のビリーフも変化すると指摘しており、大いに参考になると考えられる。

また、この第 2 の因子が取り除かれないままでいれば、最終的には学習者の心理として、第 3 因子の「日本語の発音の自信のなさ」と第 4 因子の「日本語発音へのネガティブな参加」が生じてくるの

[2] 日本語に訳すと次のようになる。(A)基本的な動機づけ条件を作成する。(B)初期の動機を生成する。（C）動機を維持し保つ。（D）肯定的な遡及的な自己評価を促す。詳しくは Dörnyei,Z.（2003）.*Questionnaires in second language research :Construction,administration and processing.*NJ:Lawrence Erlbaum Associates.をご参考。

である。4.1で述べたことから、日本人母語話者とあまり交流していないJFLの台湾人学習者は思うように、「日本語の発音の自信のなさ」と「日本語発音へのネガティブな参加」の意識が生じることも想像しがたくない。教師は「不安とあきらめ」や「自信不足」、「ネガティブな参加」を抱く学習者の心の内にも必ず存在している「積極的参加」の意識を引き出すような授業を心がけるべきである。ここでも様々な学習ストラテジー、学習目標を紹介したり、直接の教授・チェック・助言を与えたりすることが学生の持つ固定観念的なビリーフを変えるきっかけになると考えられる。また、発音の指導は、それ自体に授業時間を割くことが難しいため、他の学習項目と関連づけていかに取り扱っていくかが重要な課題である。

「5.発音が上手でなくとも将来困ることはない。」とあるように、今回の調査対象者は半分くらい入学前に日本語を勉強したことがない。聴解、会話、文字・語彙、文法、作文、翻訳などの言語能力が同時に求められているから、発音が上手でないのは仕方ないと自分を正当化したり、日本語の発音が不得手であっても問題ないと主張したりする学習者は決して少なくない。その結果、発音を練習する・学習する時間がないと考えているようである。ただこのような学習者であっても、日本語発音への可能性、期待、自己の変化という思いは、少なからず存在するのではあるまいか。

4. おわりに

以上、今回121名の大学1年生を対象に発音学習ビリーフの調査を行ったが、ここでもう一度、調査により明らかになった点を確認し考察をまとめてみたい。

まず、台湾人初級学習者の日本語発音学習には以下の特徴がある。

(1)「正しい発音のためには日本語をたくさん聞いたり話したりすることが重要だ。」は最も多くの学習者に支持されているビリーフである。

(2)性別で有意差が出たのは3項目であり、女性のほうが積極的

な姿勢を示していながら、自信が比較的足りないといった考え方がある。

(3)入学前に日本語学習歴のないグループのほうが学習歴のあるグループより自信を持っていない傾向が認められた。

(4)成績上位群が特に多く持っているビリーフの種類は発見されなかったが、積極的にイントネーションやアクセントなどの超分節音素を学習しているビリーフを持っている傾向が強い。

(5)学習者が発音の習得に対してどのように感じているのかについて、〈日本語の発音学習への気づき・積極的態度〉、〈日本語の発音に対する不安とあきらめ〉、〈日本語の発音の自信のなさ〉、〈日本語発音へのネガティブな参加〉の4因子から構成されていることが明らかとなった。

以上の結果を少しでも今後の授業で反映し、よりよい学習環境作りができるように努力しなくてはならない。教師自身は、学習者に「積極的参加」を促すために発音教育に「積極的参加」をする必要がある。教師にとっては、発音の理論的枠組や日本語についての音韻論の知識、日本語と中国語との音韻体系の異同点に関する知識は必須不可欠であり、発音チェッカーとしての存在がまず求められている。また、発音訓練を充実させるだけではなく、学習者を心理的にサポートすることも重要視すべきである。というのは、教師が学生に「できる」という気持ちを持たせ、与えるフィードバックそれ自体が学習者の発音能力向上を促進させるからである。

今回は台湾人初級学習者の日本語発音学習に対する考え方や意見を一部ながらも知ることができた。しかし、結果として現れる数字は全体的な傾向であり、個々人の学生のビリーフを知ることはできない。今後インタビューやメタファーによる方法で今回のアンケート調査の結果を裏付ける必要がある。また、実際に教育現場にいる教師たちが発音をどのくらい重要視しているかのアンケートの調査を取り入れていく必要がある。今後はこのような視点からも発音教育について考えていくことで、より効果的な発音教育について明ら

かにしていきたい。なお、Horwitz（1987）は学習者のビリーフが学習ストラテジーに影響していることなどを明らかにしたが、台湾人学習者の発音学習ストラテジー、またはビリーフと学習ストラテジーとの関係について調査を進めていくことも重要であると考える。これも今後の課題である。

〈付記〉調査に当たって協力いただいた学生の皆さんに感謝申し上げます。また、今回の調査では東呉大学日本語学科の陳永基先生、陳相州先生、阮文雅先生に調査データの集計を手伝っていただいた。この場をお借りしてお礼を申し上げたい。本稿の査読にあたり、貴重なコメントや有益なご助言をくださった査読委員の先生方にも心より感謝申し上げます。

参考文献

阿部新（2009）「スペイン・マドリードの大学における日本語学習者の言語学習ビリーフ」『名古屋外国語大学外国語学部紀要』37、pp.25-62。

鮎澤孝子（1993）「日本語学習者のイントネーション―日本語疑問文のイントネーションの習得―」『国際化する日本語―話し言葉の科学と音声教育―』第7回「大学と科学」公開シンポジュウム予稿集、pp.44-45。

磯村一弘（1996）「アクセント型の意識化が外国人日本語学習者の韻律に与える影響」『日本語国際センター紀要』6、pp.1-18。

岡崎眸（1996）「教授法の授業が受講生の持つ言語学習についての確信に及ぼす効果」『日本語教育』89、pp.25-38。

小河原義朗（1998）「日本語学習における発音学習ストラテジーの有効性の検討」『言語科学論集』2、pp.1-12。

佐藤紀美子（2007）「台湾人日本語学習者のビリーフス」『留学生教育』12、pp.119-129。

佐藤友則（1995）「単音と韻律が日本語音声の評価に与える影響力の

比較」『世界の日本語教育』5、pp.139－154。
鈴木栄（2014）「学習者の声」『リメディアル教育研究』第9巻第2号、pp.95－98。
高崎三千代（2014）「メキシコにおける日本語学習者の特性 -ビリーフ調査結果を中心に-」『国際交流基金日本語教育紀要』10、23-38。
戸田貴子（2001）「発音指導がアクセント知覚に与える影響」『早稲田大学日本語教育センター紀要』14、pp.67－87。
中川千恵子（2002）「東京語アクセント習得順序と学習者の意識」『講座日本語教育』第38分冊、pp.73-93 。
橋本洋二（1993）「言語学習についてのBELIEFS把握のための試み ：BALLIを用いて」『筑波大学留学生教育センター日本語教育論集』8、pp. 215-241。
松崎寛・河野俊之（2005）「アクセントの体系的教育を目的とした音声評価研究」『日本語教育』125、pp.57－66。
水田直美・黄其正・張金塗・伊藤克浩・細田和雅（1995）「日本語学習に関するビリーフ -台湾とオーストラリアの大学生日本語学習者の比較-」『広島大学日本語教育学科紀要』5、pp.61-66。
山本そのこ（1998）「日本語学習者の学習性向についての一考察:中国人・ドイツ人学習者のビリーフ比較から」『日本語教育方法研究会誌』 5(2)、pp.4-5。
山本そのこ（1999）「日・独日本語学習者のビリーフ比較―BALLI調査をもとに―」『拓殖大学日本語紀要』9 号、pp. 91-107。
盧錦姫（2011）「台湾の大学生の日本語学習ビリーフに関する調査研究―日本語教育改善のための基礎データ作成を考える―」『東呉外語学報』32、pp.77-106。
若井誠二・岩澤和宏（2004）「ハンガリー人日本語学習者のビリーフス」『日本語国際センター紀要』14、pp.123-140。
渡邊亜子（2001）「中・上級日本語学習者の日本語学習に関する確信（ビリーフス）：カリキュラムの作成にむけて」『調布日本文化』11、pp.87-104。

羅濟立(2017)「日語學習需求分析:以東吳大學日文系大二學生為例」『東吳日本語教育』第 40 号、pp.1-22。。
賴錦雀(2016)「台灣日語教育學研究及日本語學研究的動向與問題點」『台日異文化交流能力育成研究 5』、pp.181-188。

Carruthers, R. (1987). Teaching pronunciation. In M.L.Long & J.C. Richards (Eds.), *Methodology in TESOL, a book of readings* (pp.191-199). Heinle & Heinle Publishers, Boston.
Horwitz, K. E. (1985). Using student beliefs about language learning and teaching in the foreign language methods course. *Foreign Language Annals*, 18, (4), 333-340.
Horwitz, K. E. (1987). Surveying student beliefs about language learning. In A.L. Wenden & Joan Rubin(Eds.) *Learner strategies in language learning* (pp.119-129).New York: Prentice Hall.
Horwitz, K. E. (1988). The Beliefs about language Learning of Beginning University Foreign Students. *The Modern Lnguage Journal*, 72.(3),pp.283-294.
Oxford, Rebecca (1990). *Language Learning Strategies: What Every Teacher Should Know*. NY: Newbury House Publisher. (宍戸通庸・伴紀子訳『言語学習ストラテジー：外国語教師が知っておかなければならないこと』、凡人社)

付録：

アンケート（中国語版）

1.我希望我的發音像日本人一樣好。
2.我覺得如果發音不好的話，在眾人面前說日語會很丟臉。
3.我認為不去日本的話，日語的發音就不會變好。
4.我認為若能正確發音的話，就能正確地寫出單字。
5.我覺得就算發音不好，之後應該也不會遇到什麼太大困擾。

6.我覺得學習發音時，背單字的發音很重要。

7.我覺得即便是台灣腔日語，只要能通就好。

8.我覺得學習發音的理論知識，有助於正確地發音。

9.我覺得學校應該要有更多學習發音的相關課程。

10.日語的發音中，詞與詞、句子與句子連貫時的發音很重要。

11.我希望老師或日本人能立刻修正我錯誤的發音。

12.我覺得學習發音時，重音或聲調的位置很重要。

13.我覺得為了正確發音，大量聽說日語很重要。

14.我覺得抽不出時間來學習發音。

15.我覺得沒有說(練習)日語的機會。

16.若有讓發音變好的方法，我會很想知道。

17.我認為若能讀懂發音記號，就能正確發音。

18.對於自己的發音正確與否，沒有自信。

19.我覺得就算腦海知道正確的發音，但實際上還是常常發不出來。

20.我覺得既使日語知識或能力很好的人，只要發音不好就覺得他日語也不好。

21.我覺得發音的學習，自己學比老師教來得重要。

22.我覺得發音的流暢度比準確度更重要。